

書評・コラムを読む / 書評

書評

老人ホームで生まれた<とつとつダンス>—ダンスのような、介護のような

[著] 砂連尾理

[評者] 宮沢章夫(劇作家・演出家) [掲載] 2016年11月27日 [ジャンル] 医学・福祉 社会

ツイート

おすすめ 35

BI 1

G+ 0

■ からだが接し、生まれる関係

京都舞鶴にある特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいつる」で著者が取り組んだワークショップ<とつとつダンス>の記録だ。その作業を通じ著者があらためて、わたしのからだ、見知らぬ人のからだに接し、そこに生まれる関係を発見する経過だと読める。

ここで語られる「とつとつ」は、「訥々(とつとつ)」のように、辞書にある言葉とは異なる。かといって、特別な言葉ではなく、自分たちの創作をもっとも表現する音なのだ、ワークショップの体験、ダンスの行為、そして作品化までの時間を通じて語られる。

わたしたちに必要なのはこうした言葉だ。

たとえば、それは、小児結核や薬害スモンによって、ほとんどからだを動かすことの出来ない岡田邦子さんのダンスが描写される記述のなかにある。

「岡田さんの、ほとんど動いてないのに、明らかにそこから立ち上がるいろんなものを見せる身体そのものの不思議な奥深さ。」

左手で電動車椅子を操作することしかできず、ほとんど動けない岡田さんが、著者と踊るワークを通じ、いままで動かしたことのない右手を伸ばすと、踊る相手、つまり著者のからだを突然、触ろうとしたという。それが、『とつとつダンス 愛のレッスン』に結実する。著者は、ダンス経験もなく、からだも動かせない岡田さんのものすごい存在感に驚きこう記す。

「あらためて踊りやダンスというのは、目に見える身体の動きだけではないということ、岡田さんとのセッションで教えられた。」

コンテンポラリーダンスを見てもよくわからないという声は多い。けれど、私が見ている世界もむづかしい。日常にもある「わからないこと」をいかにして安易なルールでわかったつもりにならないか。それで表現は、ようやく表現になる。著者は<とつとつダンス>と名付けた踊る行為によってわからないもの、気がつかないモノの声を聞く。

◇

じゃれお・おさむ 65年生まれ。ダンサー・振付家。ソロ活動のほか、障害のある人や高齢者とダンスを制作。

この記事に関する関連書籍



著者: 砂連尾理 出版社: 晶文社 価格: ¥ 1,836

ブック・アサヒ・コム書店
Amazon.co.jp
楽天ブックス
紀伊國屋書店ウェブストア
TSUTAYA online

新聞購読のご案内 朝日新聞 会社案内・事業紹介

発売 2016.11.11

ハリ・ポッターと死の秘宝から19年後——8番目の物語

静山社

ハリ・ポッターと呪いの子 第一巻 第二巻

J.K.ローリング

企画・制作 朝日新聞社広告局 BOOKasahi.com

今日のサマソヤツ 朝日新聞の小粋出版広告 詳しくはこちら

書評委員のご紹介

2016年度の評者

五十嵐太郎 市田隆 円城 塔 大竹昭子
加藤 出 柄谷行人 斎藤美奈子 佐倉統
末國 善己 杉田敦 武田徹 立野純二
中村和恵 峰飼耳 原武史 保阪正康
星野智幸 細野晴臣 宮沢章夫 諸富徹
横尾忠則

2015年度の評者

2014年度の評者

2013年度の評者

2012年度の評者

2011年度の評者

2010年度の評者

2009年度の評者

2008年度の評者

2007年度の評者

2006年度の評者

2005年度の評者

2004年度の評者

文芸

政治

経済

人文

国際

アート・ファッション・芸能

歴史